

# 神に対して生きている

ローマ 6 : 3 - 11



司祭 ヨハネ 井田 泉

2017年7月2日  
聖霊降臨後第4主日

奈良基督教会にて

わたしたちの教会は先週、創立 130 周年を記念して礼拝をささげ、神さまを賛美し、先輩たちの信仰の労苦を感謝しました。同時にこの教会に新しく 6 名の堅信、ひとりの初陪餐者が与えられたことをともに喜び祝いました。礼拝、祝会、130 周年記念誌、その他さまざまな面で多くの方々が祈りと奉仕をささげてくださったことを心から感謝します。

記念礼拝と祝会は終わった。しかしただ終わったのではありません。ここから新しい教会の歴史が始まったのです。神さまの祝福と使命を受けて、将来に向かって歩んで行きましょう。

ところで教会創立 130 周年記念の一環として、公開聖書講座を昨年からは開始し、この 5 月には第 6 回として「ローマの信徒への手紙」を取り上げました。十分な準備したとはどうてい言えませんが、しかしそれでもローマ書の中の核心部分、言い換えれば、ローマ書の中に燃える神の愛の火について触れたものです。（全文原稿を印刷したものががありますから、参加されなかった方もご一読くださればありがたく思います。）

この聖書公開講座を思いついたひとつのきっかけがあります。それは今からおよそ 1300 年前の平城京の時代、非常に仏教が盛んとなっていました。一方では行基による社会事業がありました。国家の禁止を犯して民衆に仏の教えを説き、ため池を掘り、

橋を渡し、貧しい人々を救済しました。他方新築なった東大寺では、華嚴経の講義が、新羅出身とも言われる<sup>しんしやう</sup>審祥という僧によって数年にわたって数十回連続的に行われたといえます。

詳細を調べた訳ではありませんが、一方で社会的事業が行われ、他方では仏教の經典の講義が行われる。キリスト教がもう一度力を取り戻すには、この両者が必要ではないかと感じたのです。

聖書の深みに継続的に触れ続けることがあってこそ、信仰の力が増し加えられ、教会の将来が開けます。なぜなら、かつて聖書をとおして語られた神は、今も聖書をとおして語り続けておられるはずだからです。

わたしは幼稚園の礼拝で、年度の初めには、礼拝堂について、十字架について、祈りについて、1回ずつごく短く話していきます。「聖書」について話すときは何と言うかということ——「聖書は神さまの本です。聖書を開くと、神さまの優しい声が聞こえます」。わたしたちもそのような声を聞きたいと願います。

さて今日は使徒書としてローマ書第6章3節以下が朗読されました。

「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエス

に結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。」6:3

あまり優しい声とは聞こえないかもしれませんが、今日はここに留まってみましょう。

「それともあなたがたは知らないのですか。」

パウロはきつい言い方をしますが、それは何としても洗礼の大事な意味を皆に知ってほしいからです。

「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたち」

洗礼というのは、イエス・キリストに結ばれることだ。イエス・キリストと決定的に結ばれるのが洗礼だ、というのです。でも、わたしはもう一歩わかりたい気がしました。そこでギリシア語の原文を見てみました。するとこんなふうに書いてあります。直訳ふうに訳します。

「あなたがたはキリスト・イエスの中へと洗礼を受けた」

洗礼というのは、ただこちらが理解するとか受け入れるというようなことを超えて、救い主イエスさまの中にわたしが入ってしまうことだ、というのです。イエスがわたしたちを招いて引き寄せて迎え入れてくださるので、わたしたちは自分の真心をイエスさまに注ぎ込む、そしてイエスさまの中に入ってしまう。これが洗礼なのです。

そうするとどうなるのか。

「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。」 6:3

「その死にあずかる」とは何でしょうか。

ギリシア語は単純な言い方です。

「あなたがたはキリスト・イエスの中へと洗礼を受けた。彼（キリスト・イエス）の死の中へと洗礼を受けた」

キリストは死なれた。キリストの中に入った古いわたしも死んだ。それは新しいわたしの命が始まるためです。8節を読みましょう。

「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。」 6:8

ところでキリストと共に死ぬ以前のわたしたち、キリストと共に生きる以前のわたしたちとはどういうわたしたちなのでしょう。それは、神を避けるわたしたちです。

創世記第3章にこのように記されています。

人類の最初の間人アダムとエバは、エデンの園で幸せに暮らしていました。神と人とは愛と信頼で結ばれ、人と人も愛と信頼で結ばれていました。ところがあるとき、神に禁じられたものを二人は食べてしまいます。するとどうなったか。

「その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、……」創世記 3:8

神との間に破れが生じました。神が近づいてこられるのがこわい。負い目があるからです。以前はまったくそんなことはなかったのです。

そこで二人は「主なる神の顔を避けて、園の木の間に」身を隠します。

今日朗読された旧約聖書日課は、さらに深刻な事態を描いていました。

「岩の間に入り、塵の中に隠れよ、主の恐るべき御顔と、威光の輝きとを避けて。」イザヤ 2:10

真実を失い、傲慢な知恵を獲得した人間は、神を避ける。傲慢になってしまった人間は神に背き、人を卑しめ、自分をも損なっていく。神に直面しないままに、自分の愚かさに気づかないで、背きと過ちを積み上げていく。

しかし神は、このような愚かで痛ましい人間のありようを放置することができませんでした。間違った方向に突き進む人の道を終わらせて、人をもう一度ご自分のもとへ引き寄せようとされました。これがイエス・キリスト、その降誕です。

イエス・キリストに招かれ、イエスの中に迎え入れられたわたしは、神を避けるのではなく、神に向かって生きます。過ちを重ねたとしても、苦しみと重い困難を抱えているとしても、神を見つめて、神に向かって、神にまっすぐに対して生きていきます。神の赦しがあるので、わたしたちに悔い改めが起こり、方向転換が与えられたからです。

詩編第 16 編の作者はこう歌いました。

「わたしは絶えず主に<sup>あいたい</sup>相對しています。

主は右にいまし、わたしは揺らぐことはありません。」 16:8

ペテロは聖霊降臨日の最初の説教でこの詩編を引用してこう言いました。

「わたしは、いつも目の前に主を見ていた。

主がわたしの右におられるので、わたしは決して動揺しない。

だから、わたしの心は楽しみ、舌は喜びたたえる。

体も希望のうちに生きるであろう。」使徒言行録 2:25-26

ペテロはこれをイエスについて語ったのですが、わたしたちにとってありがたいのは、イエスについて言われることはわたしたちのことになるのです。洗礼はわたしたちをイエスと一体にする。ですからイエスの嘆きはわたしの嘆きとなり、イエスの喜びはわたしの喜びとなり、イエスの希望はわたしたちの希

望となり、イエスの命はわたしたちの命となるのです。

「このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」ローマ 6:11

心配しなくてよい。イエスがまっすぐに神に対して、神に向かって生きておられるので、わたしたちもイエスのうちにあつて、まっすぐ神に対して、神に向かって生きていくことができるのです。

神さま、わたしたちはしばしば多くのことを考えて悩みつつ、あなたにまっすぐに向かおうとしてきませんでした。どうぞおゆるしてください。けれどもあなたは、洗礼によってわたしたちをキリストとひとつにし、キリストと共にまっすぐにあなたに向かうようにしてくださいました。このことのうちにある祝福と命と喜びを新しく経験させてください。あなたに向かうことをためらう魂を、みもとに引き寄せてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン